北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1987．7．1

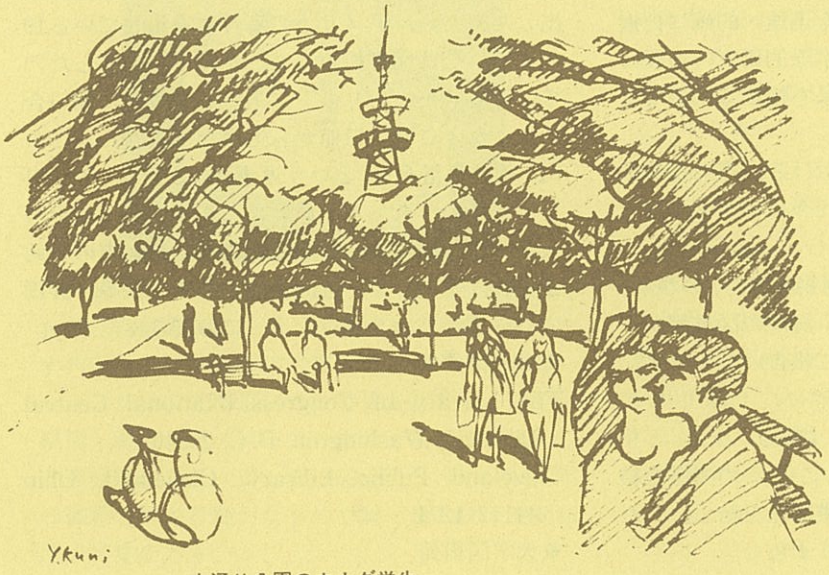
第9巻第2号

通巻102号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

ダメモト

画と文・國田祐作



大通り公園のカナダ学生

いつだったか，大阪の友人と明石のあたりを歩いていたことがある。海沿いの道には無人の別荘が広い庭を構えていた。私たちはもう一本向うの山側の道に出たい。それにはこの庭をはるばる迂回しなければならぬ。「この庭を抜けよう」と友人が提案した。私がためらっているとダメやってもモトモトやないか，と古い門をくぐって歩き出した。それはダメではなかった。私たちは裏門から抜けて，おまけに深い木立の静けささえ堪能したのである。こういうのをダメモトというのだと，その友人は言った。私などはもともとダメだと最初から諦めるところがある。もとダメ，である。それがオクユカシイという思いもある。

先日，カナダのレスブリッジ大学から本学に研修に来ている学生と道立美術館に出かけた。美術を専攻している三人のうち，ひとりの女子学生がとくに日本画に興味を持っていて熱心に観ていたが，帰りぎわ，受付で何やら頼みこんでいる様子である。席を立った受付嬢はしばらくして紙の筒を持ってきた。それはこの日本画展のポスターだった。「二枚しかないんですけど」とお嬢さんはそう言って手渡した。私はそれが欲しい，手に入ればとても幸せである，と女子学生は頼み，そして，それを得た。ダメモトである。

翌日，美術研究部の学内展を見に行く途中，この連中と顔を合わせたので一緒に誘った。はじめ棒立ち気味だった双方の学生諸君も，部長のＩ君の絵の女性がケイト・ブッシュであると諒解し合うと急に打ちとけはじめた。私にはケイトとは誰なのか，見当がつかない。若い人たちの談笑の声をあとに，私は会場を離れた。あとで聞くとケイトというのはロンドンの有名な歌い手なのだそうだ。彼らの残した感想文には，初心者にしてはとても力強い，印象的な展覧会だったと，交々（こもごも）書かれていた。

知的好奇心，という意味でなら「ダメモト」もまんざら悪いものではないと思っている。

（くにた・ゆうさく　教養部教授・芸術論）

British Library, アメリカの大学, 公共図書館との相互貸借案内

近年の学術研究の急速な進展に伴い，その成果として生産される学術情報の量は急激に増大してきました。今日，世界で流通している学術文献は，年間数百万件にのぼると言われています。

先進的，独創的な研究を進めていくためには，過去から現在に至る研究成果を迅速・的確に把握する必要があります。また，学際的研究の進展により，関連する分野の研究成果を幅広く入手する必要も増しています。

このように，大学図書館における国際的な学術情報の収集・提供の必要性は，今後ますます増大していくでしょう。

次に，本学図書館の「国際間相互協力」の現状，特に，本学教員より要望が多い海外の図書館からの図書の借受の現状についてご報告いたします。

本学の図書館は，昭和45年に，イギリスのBritish Library（英国図書館）（略称：B. L）と相互貸借（相互に図書を貸借すること。）の関係を結びました。このB. Lと相互貸借関係を結ぶにあたっては，いろいろな問題がありました。

本来ならば，日本の大学が，このB. Lから図書を借用する場合は，日本のNational Central Libraryといえる国立国会図書館を通して行なわれると考えるのが国際的通念ですが，今のところ，国立国会図書館を通じたB. Lからの図書借用の窓口利用の事例は聞いたことがありません。この件で，B. Lと国立国会図書館へ何度も手紙の往信をいたしました。その結果，日本の大学図書館が，このB. Lから図書を借用する場合は，必ず，本学を通して行なうこと（図書現物貸借の日本の大学の窓口）で相互貸借関係が成立いたしました。

昭和45年以来，本学では，B. Lから毎年10冊程，借用しています。最近の他大学からの申込状況は，北海道教育大学札幌分校　3冊，札幌医科大　1冊等です。また，今までに問い合せのあった大学は，国立大　5大学（大阪府立大，静岡大，東北大，北大，小樽商大），私立大　12大学（立命館大，龍谷大，東洋大，法政大，鶴見女子大，東北福祉大，この他　道内の6大学）でした。

次に，ここ数年前から，学内の研究者より，アメリカの大学または公共図書館との間で，相互貸借の関係を結ぶことができないだろうかという声が強く，出てきましたので，ハーバード大学図書館に，「アメリカを中心にした大学，公共図書館の中で，海外の図書館と相互貸借をするところを教えていただきたい。」という趣旨の調査依頼文書を出したところ，アメリカの海外に貸出している19の大学，公共図書館のリストを送ってきましたので，確認のため，リストにある各図書館に問い合せましたところ，11館から返事がきました。この内，相互貸借O・Kという返事が，9館でした。以下に，そのリストを記載いたします。アメリカの大学，公共図書館から図書を借用したい方の一助となれば幸いです。各図書館の利用方法等，詳細につきましては，カウンターにお聞きください。

※公共図書館

The Library of Congress (National Central Library). Washington, D. C. 20540

Cleveland Public Library. Cleveland, Ohio 44112-1271

※大学図書館

Duke University, Libraries. Durham, North Carolina 27706

Ohio State University, University Libraries, Columbus, Ohio 43210

University of California, University Library. Los Angeles, California 90024

University of Cincinnati, Library,Cincinnati, Ohio 45221-0033

University of Colorado at Boulder, Library. Boulder Colrado Boulder, Colorado 80309

University of Minnesota,Libraries. Minneapolis, Minnesota 55455

University of Rochester, Libraries. Rochester, New York 14627

University of Virginia,Library. Charlottesville, Virginia 22903-2498

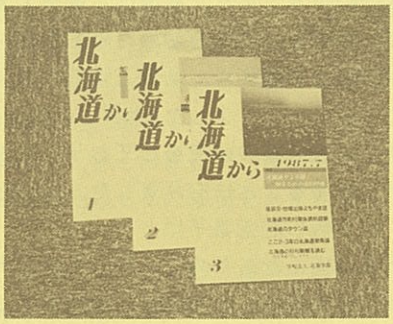
Washington University, Libraries. St. Louis, Missouri 63130

Yale University, University Library. New Haven, Connecticut 06520

(S)

「北海道から」第３号発刊

～図書館編集の『北海道市町村関係資料目録』（昭和54年以降版）採録～



待望久しい『北海道から』の，第三号が発刊された。特集記事として〝北海道をより深く知るための本539冊〟が紙面の大部分を割いて組まれている。これは，北海道について書かれた本―政治・経済・産業からスポーツ・文学・芸術までほとんどの分野にわたっている―539冊について約400字の書評と解説を加えたもので質・量共に大変興味深い特集である。

それにも増して今回特に注目されるのは，グラビア・ページに図書館に所蔵している北駕文庫が紹介されていること，そして私達図書館員が編集した『北海道市町村関係資料目録』が巻末に載っていることである。この目録については，当図書館に所蔵している市町村関係資料は勿論のこと，他図書館の所蔵資料についても調査を行い，昭和54年以降に刊行された資料について見逃すことの無いよう出来うる限りの努力は払ったつもりである。今回この目録編集のための調査を重ねていくうち，単に〝市町村関係〟の資料として収録するには疑問符のつくものが数多く目についた。しかし，削除することに判断のつきかねる素材もあり，それらは館員で討議の上，選定させてもらった。理由は凡例にもある通りである。以上，いくつか不備な点があるかもしれないが，この種の目録は他に例を見ないと思うので53年以前の目録と併せて活用していただければ幸いである。

夏休みこそ名作を味わいたい!!

軽薄短小の時代といわれて久しく，本といえば軽いエッセイか，薄い文庫本しか読まなくなっています。私自身も本を選ぶ時，通勤電車の中で読めるものを，なんて，ついつい長編を敬遠してしまいがちです。だがしかし，はたして，これが正しい読書の姿でしょうか？　なんて大袈裟じゃなくっても夏休みこそ普段，敬遠しがちな長編名作にチャレンジしてはいかがですか？

下のリストは図書館の蔵書・全集本の中から，これはおもしろいぞー!!というものを選んでみました。もちろん，必読の名作などと声高に言うつもりもありませんし，一種の教養主義的な読書姿勢にも反撥を覚えます。しかしたまにはこの手の名作を読んでみるのもいいものですヨ。もしかしてこれまで気づかずにいた読書の充実感にめぐりあえるかもしれませんぞ!!

○シャーロック・ホームズ全集　全21（東京図書）933　D　89

○ロマン・ローラン全集　全35（みすず書房）958　R　64

※ジャン・クリストフ（１－４巻）

○ツヴァイク全集　全21(みすず書房)　948　Z 9

※人類の星の時間（５巻）

○戦争と平和

※トルストイ〈世界文学大系　62・63巻　筑摩書房〉908　Se　22

○トーマス・マン全集　全13(新潮社)948　Ma　48

※トニオ・クレーガー〈世界文学全集　23巻　講談社〉

○失われた時を求めて　全７　マルセル・プルースト　新潮社　953　P　94

○チボー家の人々　全５　マルタン・デュ・ガール　白水社　953　Ma　53

○ファーブル昆虫記（岩波文庫）

※印は全集の中でも特におすすめ本の印です。

さあ，この夏休み，あなたなら何を読みますか？

電子工学の片隅で30年

佐　藤　正　義

丁度30年前，私は北大理学部の物理学科を卒業し，大学院学生として磁気研究室に所属しました。先生から与えられた研究テーマは「強磁性金属微粒子の電気的挙動」でした。以来，5年間，数%のCoをCuに溶かし，Cuの中にCo微粒子を析出させて，この微粒子の磁気的挙動を調べました。

磁気の研究には，2つの方向があると思います。1つは結晶の磁気の原因を明らかにすること，他は磁気の挙動を明らかにすることです。当時の主流は前者だったと思います。また，磁気の原因を調べる対象としては，金属は複雑で不向きと考えられ，酸化物（フェライト）で，その研究が盛んでした。実用面では，当時の計算機の記憶素子は，フェライト磁石で作ったフェライトコアであり，次代の記憶素子としては磁性薄膜が考えられていました。したがって，学会での発表の大多数は，フェライトと磁性薄膜に関するものでした。

私の研究の目的は，当時最強の永久磁石であった「アルニコV」の，磁気的に強力である原因を明らかにすることでした。この「アルニコV」と言う磁石は，音響機器であるスピーカーのほとんど全てに使用されていた筈です。したがって，電子工学に，少しは，関係していたと思います。

昭和30年代中葉，電気系の会社で中央研究所ブームが起りました。会社からの求人など考えもせず大学院に在籍していた私にも，修了1年前に，日立の中央研究所から勧誘がありました。雑用がなく，好きなことが出来ると言うことで，大学院修了と同時に日立に入社しました。ところが，工場からの依頼の仕事がほとんどでした。

電子工学に関係ある仕事をあげて見ます。ある工場で，計測機器に使う半硬質磁石を製造することになり，1年間この磁石の研究をしました。また，別の工場で，10年後に使われると予想された電話交換用記憶素子を試作することになり，ピーバックツイスターと言う記憶素子の研究を，これも，1年間続けました。依頼研究ばかりではと言うことで，超電導の研究を始めました。米国海軍の研究所の人が来日した折，私達が研究していたような超電導材料で，彼等は直流増幅器を試作しているとのことでした。私達は，電子工学とは無関係に，超電導の研究を始めたのですが。

5年間の会社勤務後，北大工学部の電子工学科に勤めることになりました。所属した研究室では，半導体と磁性薄膜の研究をしており，私は磁性薄膜の研究をすることになりました。先に記したように，計算機の記憶素子にと言うことで，磁性薄膜の研究は盛んだったのですが，私が北大に来た時には，計算機の記憶素子は半導体素子になってました。したがって，流行遅れとなった磁性薄膜の研究を始めたのです。

しかし，磁性薄膜には，解明すべき多くの問題が残されており，ある性質の原因を明らかにすると言うような仕事は十分ありました。丁度その頃，「応用物理」という学会誌の巻頭言に，「事実と真実」という文章があり，非常に参考になりました。「事実と真実」ということに，ぴったりではないかと思われる仕事があったので，それを発表しました。松下電器の研究員から別刷請求があったので，日本電気の研究員である卒業生に，この様な論文をどうするのだろうと尋ねたところ，磁気テープおよび磁気デスクの記録媒体として，磁性薄膜が，再び，重要視されているとのことでした。磁性薄膜の研究を続けるのなら，より基本的であると思われる，強磁性金属微粒子の研究をすべきと考え，7～8年前，金属微粒子の研究に戻りました。

30年前，私は，私の先生に，物性物理（電子物性）の研究とは，物のからくりを知ることである，と教えられました。電子工学のおかげ（片隅）で，30年前の教えをもとに，30年前の研究テーマと取り組んでいます。

（さとう・まさよし　工学部教授）

レスブリッジ大学に滞在して

河西　勝

昨年8月，本学からレスブリッジ大学に派遣された15名の学生の引率者の一人として，渡加した。9月から11月まで，同大学の秋学期で主に日本の歴史，政治，経済を紹介する講義を担当して，12月始め帰国した。南アルバータに位置するレスブリッジ市は，大学と市民とが一体となって，学生たち，引率者そして私の家族を大変歓迎してくれた。

石油，小麦，テンサイ糖，畜産といった一次産品を主体とする南アルバータの地域経済は，オーストラリアや北海道と同様に，今はあまり景気がよくない。大学生も，自分の希望する職につけるかどうか大変不安で，気持ちがふさぎがちである。しかし，レスブリッジの人々は，既に100年余の歴史をつうじて，どうしたら，十数もの民族が厳しい自然環境のなかで相互に尊重し合いながら精神的に豊かな生活をつくり上げることができるか，ということを考え抜き，実践してきた。かれらは，もともと「外国人」であり，かれらが時にアジア系とみなす「インデアン」との苦渋にみちた戦いの歴史をもっていた。私たちは「外国」に行った。しかしかれらは「外国人」が来たと思うよりも，一時的であれ何であれカナダの地で共に生活をする同じ仲間として，私たちを遇したのではないか。私の息子と娘は，学期が始まるとすぐ小学校の3年と6年に編入されたが，その課業以外に，資格をもった非常勤の先生に英語を徹底して教えてもらった。英語は授業とか勉強とかいう前に，生活の必要そのものであることを思い知らされた。先生のG夫人とD夫人は，強く朗らかな人で，私の子供たちがクラスや近所のみんなとなかよくできるように大変苦心してくれた。小学校は，地域社会の協力によって運営されるべきものとされており，さまざまな機会に両親が子供と一緒に学校に集まった。一度夜に子供にせがまれてファッションショウを見にいった。子供，両親，先生は，一方モデルになって体育館に急こしらえの舞台をシナをつくって歩けば，他方が観客になってそれに拍手喝采した。

大学も，レスブリッジ市民の生活の一部として，欠くことのできないものとなっているように思われた。夜に，大学のホールで，音楽，演劇，バレー，講演などの催しものがよくある。こんな時には，人々は盛装して参集し，大学のレストランで家族と夕食をともにする。大学が社交の場となっている。また大学はアルバータ州やホンコン，台湾，シンガポールなどの青年の就職のための教育という以外に，いわゆる生涯学習のためにも市民によく開かれている。体育館や柔道等の道場，そしてすばらしいプールはいつも市民や子供たちで賑わっている。小規模だが多数の絵画を保存できる美術館が定期的に公開展示を行なう。そんなわけで大学の図書館でも，学生や多くの人々の利用を考えて，いろいろな工夫がこらされている。例えば開館時間が夜10時までで，土曜日，日曜日も開かれている。これはアメリカの大学ではよくあることだそうであるが，本学でも考慮してみてよいのではないかと思った。土，日曜日に開館すれば，市民といわないまでも，OBが「生涯学習」のために図書館をおおいに利用できる。それをみて現役の学生諸君も勉強の大切さに気ずき，大いに本を読むということになるかもしれない。

年中で最大のイベントはやはりクリスマスということになるが，私たちはその前にカナダを去った。この4月には7月までの客員教授として，イアン・マッケナー氏がレスブリッジ大学から本学に赴任された。6月に子供さんと共に後を追ってきた夫人から，娘のG先生の15歳の女の子が酔払いの青年の車に引き殺されたこと，G先生が余りの悲しみで教壇に立てなくなったこと，を知らされた。カナダも日本もない，私たちは，現代文明の病根にたいして，同じ悲しみのところに立っていると思った。

（かさい・まさる　経済学部教授）

自著を語る－⑤

『張謇と辛亥と革命』

北海道大学図書刊行会（1985）

藤　岡　喜久男

『張謇と辛亥革命』が出てからもう二年近くなる。この間あれを書いていた頃のことを時々思いだすことがある。同じく日記をつかったシャオニクンチュアンの『翁同龢と戊戌変法』を翁の日記と、フォイエルワーカーの『中国の初期産業化』を盛宣懐の電稿など（『愚斎荐稿』）と併せよんだ時のこと等々。その時私は先人に対しありがたいと思うとともに，自分を誡しめたものである。今私がよんでいる張謇関係の史料をいつまた誰がよむであろうか，それはおそらく遠い先のことであろう，私は私なりに今一字一句のがさず，丹念によまなくてはならない，そして書き残しておこう，それは将来このあたりをやる人と労を分ちあう所以であろう，私がシャオ氏・フォルワーカー氏等々とそうであったようにと。

話がやや先走りしたようであるから，少し遡ってのべよう。あの本は張謇（1853～1926）という人が53年間にわたって書きつづった『柳西草堂日記』を中心に，彼個人にかかわるいくらかの史料をよんで書いたものである。さらに私がそこによみとろうとしたものは，資本家であり，進士の資格をもちながら官僚にならなかった彼が，一介の郷紳として立憲と革命に対して一体何をしたか，それらといかに関ったか，であった。当時は，周知のように立憲派という，立憲君主制を樹立し，議会の場で近代的諸改革を進めようとする人々と，革命派という，とにかく腐敗した清朝を滅満興漢という民族意識に燃えて倒してしまおうとする人々とがいたが，彼は前者の指導者であった。かかる彼は，革命勃発時まで数回にわたって立憲請願運動を行なっていたが，革命が一旦起ってしまうと，彼自身明言しているように，革命による被害を避け，革命を支持し共和に賛成した人であった。そして自らその大臣となった新政府が一日も早く列強に承認されるよう，努力したのであった。

つまり，革命に便乗した立憲君主制論者とも解しうる存在である。革命自体を金科玉条とする立場からは貶められ，その故に研究対象とされぬむきもあった。また革命に反対する立憲派であったために反動視され，進歩主義的研究者から疎まれることもあったようである。しかし，それだけに複雑な，屈折した軌跡の持主であり，ましてそれを単なるオポチュニズムと解しない私は，十分意味のある陰翳をたのしませてくれる人物であった。

以上のように，私はこの本で辛亥革命そのものを問題にしなかったのはもとより，張謇なる人物を全体的に把えようともしなかった。或る先生が私の本に関し，それは張謇の多くの問題とその全生涯を論述した『近代中国の改革者―張謇』(1965)と銘うったサムエル C.チュ氏の本を越えるものではない，残念ながら，と評して下さった。しかし，それは私にとって必ずしも残念ではない。私はそもそもそのような巨大な意図をもたなかったから。私は，限られた問題に関してであるが，『日記』を用いることによって，先人の『九録』と『年譜』による研究を二、三修正し，新たな視点にたつことができたものと思っている。

また，或る先生は，私の本のよみずらさの根拠の一に，史料の引用が多く「原文」のままであることを挙げられた。正直なところ，私はそれをうかがって驚いた。その先生は，それではよむ者はその度に思考が中断される，よむ側がそれを翻訳し語釈しなければならないから，といわれるのである。実のところ，それをやればあの本は二倍，或はそれ以上のものになったであろう。それはともかく，この種のものをよむ際「原文」であろうと翻訳であろうと，史料をよむことが思考を中断する筈はない。それをよんでこそよむ側の思考が著者のそれとともに進むのではないか，否定的にしろ，肯定的にしろ。たとえ，史料を翻訳によって紹介してくれてあっても，「原文」にあたってみぬ以上，所詮著者の見解を肯定も否定もできない，というのが，私どもの経験である。

さて，最初のところにもどろう。私はあの本を先のようにいつの日か他山の石ぐらいにはなろうものかと思って書いたのであった。それが史料の位置づけとかさらには解釈とかの点で，人さまと労を分ちあうのはいつのことであろうか，と待望される。

（ふじおか・きくお　法学部教授）

Lady Robinson (1903—83) を偲んで

—本と人—その2*

柴田義人

*その1は「Sir Harrodを偲んで」である。『図書館だより』第一号昭和54年5月10日）

1966年（昭和41年）の春，私ははじめての海外での研究生活に向けて準備を急いでいた。その頃ロビンソン夫人のEconomic Philosophy, 1962.が宮崎義一教授によって『経済学の考え方』として邦訳された。私はその「訳者あとがき」を読んで，十年一昔というけれど，これはどのような心理的条件の変化なのかと思った。

それは「本書が〝The New Thinker's Library〟の創刊第一号として出版されただけに，ケンブリッヂ大学のSenate House の向い側に位置するBowes & Bowes書店のショウ・ウインドウにもだいぶ長い間，著者の写真と共に飾られてかなり目立った取扱いを受けていた。」としるされていたからである。実はロビンソン夫人の『不完全競争の経済学』(1933)が加藤泰雄教授によって邦訳されたのが1956年（昭和31年）のことで，その序文の前の頁に，次のような文章が，Joan Robinsonのサイン入りの原文とともに掲載されていたのだった。「拝復　わたくしの『不完全競争』が近く刊行されるはこびとなったと伺ってひじょうに欣んでおります。どうも適当な写真がないようですし，またいずれにせよ，わたくしの顔を眺めたとて，わたくしの理論を理解するのに役に立つとは考えませんので写真を出されることは好まないのです。敬具」

1966年10月10日(月)ケンブリッヂ大学における私の研究生活は，憧れのレディ・ロビンソン教授の今年度の初講義から開始された。（参照，拙稿「ケンブリッヂ大学点描」『経済セミナー』5月号，1967年5月．「ケンブリッヂ大学の研究生活」本学『経済論集』第20巻第2号，1972年9月。）そして，Bowes & Bowes書店でご覧のようなロビンソン夫人の写真入のあるカバー付きの，Economic Philosophyを買い求めたのだった。ちなみに当時1s＝¥50，15sであった。

ところで『不完全競争の経済学』に始って，『資本蓄積論』(1955）に至り，『経済学の考え方』を経て「経済学の第二の危機」(1971）に及ぶ，ロビンソン経済学の基本的構造については，すでに，私のいわば追体験の一部を研究ノート（本学『経済論集』第26巻第3号1978年12月）として公表している。それだけにこの度追悼の文を書かねばならなくなったことは，私の研究の遅滞と言う他はなく，正に痛恨の極みである。

1971年（昭和46年）12月末，アメリカ経済学会に招かれて行われた記念講演「経済学の第二の危機」は，ロビンソン夫人の生涯における「第二の危機」であり，「第一の危機」はケインズ革命のときであった。この講演は，たまたまほぼ同じ頃スミソニアン博物館において開催された，G10による「スミソニアン合意」の結果，22年間続いた1＄＝¥360の固定為替レートが1＄＝¥308に変更された時期に照応しており，私には日本のエコノミストに対するロビンソン夫人の警言とも思われた。（参照，拙著『現代資本主義の経済変動論』1982.）

しかもこの講演に先立つ2年前の1969年12月，バーゼル大学での講演「憂うべき経済学の現状」（編集部訳『季刊現代経済』No. 1, 1971 June p. 14）に次のような一節がある。「新々古典派（neo-neo classical）の経済学者たちは，自由放任主義に対する弁護を復旧して，『一般理論』を去勢してしまった（中略）ケインズによってさし始めたあけぼのの新しい光が雲に覆われてしまったのだった。経済学は，再びもとの位置に戻ってしまったのだった。神学の一部にである。他方，現実の経済での問題も新しい段階へと発展しつつあるのである。」

ケンブリッヂで私がお世話になった，当時シカゴ大学から留学中の宇沢弘文教授の紹介によるならば，ロビンソン夫人の祖父モリス教授はロンドン大学の神学教授であったが，神の存在を信ずることができなくなって職を辞し，また，父モリス将軍は第一次大戦における大陸派遣軍の参議長として事実に反する戦況の公表に反対し，ロイド・ジョージ首相によって罷免された「モリス事件」のその人だった。（宇沢弘文訳『異端の経済学』1973年 p. 237）（1987年6月21日，父の日に）

（しばた・よしと　経済学部教授）

新着図書（選）－教養

本田宗一郎は語る　本田宗一郎著　講談社インターナショナル編
中国の人と思想（全12巻）　日本アートセンター編　集英社
西洋哲学史概説　岩崎允胤　鯵坂真編　有斐閣
日本人の深層分析12　馬場謙一編　有斐閣
認知科学選書　5　戸田正直〔ほか〕編　東京大学出版会
母子関係の理論（全3巻）　J.ボウルビィ著　黒田実郎〔ほか〕訳　岩崎学術出版
薔薇十字の覚醒—隠されたヨーロッパ精神史—　F.イエイツ著　山下和夫訳　工作舎
現代人の宗教（全10巻）　丸山照雄〔ほか〕編　御茶の水書房
ギリシアの神々　曽野綾子，田名部昭著　講談社
物質文明・経済・資本主義　15—18世紀II－1　F.ブローデル著　山本淳一訳　みすず
日本歴史大辞典1—10，別巻1，2　日本歴史大辞典編集委員会編　普及新版　河出書房新社
縄文文化と日本人　日本基層文化の形成と継承　佐々木高明著　小学館
ウォッチング札幌—地図に映る150万都市—　札幌地理サークル編　北海タイムス
西欧前近代の意識と行動　青山吉信〔ほか〕編　月水書房
イギリス国民の歴史〔正・続〕　古代イングランドから百年戦争まで　J.R.グリーン著　和田勇一訳　篠崎書林
私のなかの歴史　1～6　北海道新聞社編　札幌
森鷗外・母の日記　山崎国紀編　三一書房
内村鑑三伝　米国留学まで　鈴木俊郎著　岩波
中国辺境歴史の旅　1—5　陳舜臣編　白水社
ビバ！ヨーロッパ　—スケッチ片手に100日の旅—　相馬清士，美津子著　札幌　共同文化社
内外人がみた日本　対談　長谷川慶太郎，G.クラーク著　秀英書房
ブームが来る　—経済と政治と社会ご　H.カーン著　長谷川慶太郎訳　講談社
変貌する地方都市　—港まち敦賀市の歴史的研究—　大道安次郎著　恒星社厚生閣
人間と集団・社会　磯貝芳郎著　勁草書房
日本人の人種観　家坂和之著　新版　弘文堂
社会調査論　社会科学としての社会調査　大橋隆憲〔ほか〕編　京都　法律文化社
サーベイ・リサーチの世界　奥田和彦〔ほか〕著　白桃書房
死角　巨大事故の現場　柳田邦男著　新潮社
子どもたちへの詫び状　村上通哉著　朝日新聞社
教育を改革するとはどういうことか　大田堯，堀尾輝久著　岩波書店
斉藤喜博全集　第2期全12巻　国土社
つっぱり母さんの記　—わが子の登校拒否と向き合う—　佐藤貴美子著　汐文社
登校拒否・新たなる旅立ち　横湯園子著　新日本出版社
いい先生見つけた　中学校編　三好京三著　潮出版社
学級の文化をつくる学級新聞　高田哲郎著　民衆社
中学歴史の授業　—課題プリント・板書・留意事項—　松本幸夫著　民衆社
シンポジウム塾と学校　塾問題研究会編　ぎょうせい
酒落者たちのイギリス史　騎士の国から紳士の国へ　川北稔著　平凡社
青い狐　—ドゴンの宇宙学—　M.グリオール，G.ディテルラン著　坂井信三訳　せりか書房
ダーウィン以来上，下　S.J.・グールド著　浦本昌紀，寺田鴻訳　早川書房
君は，エントロピーを見たか？　—地球生命の経済学—　室田武著　創拓社
風景のデザイン　G.エクボ著　久保貞〔ほか〕訳　鹿島出版
北海道主要樹木図譜　宮部金吾，工藤祐舜著　順崎忠助画
普及版　北海道大学図書刊行会
ブナ帯文化　梅原猛〔ほか〕著　K・I・C思索社
テレポート　世界を結ぶ情報都市ネットワーク　長谷川文雄著　日刊工業新聞社
バンダーラ美術紀行　林良一著　時事通信社

新着図書(選)－経済

経済学大辞典1～3　熊谷尚夫〔ほか〕編　東洋経済新報社
情報化社会に生きる　―経済とくらし―　北海道大学放送教育委員会編　北海道大学
構造変化と経済成長　―諸国民の富の動学に関する理論的エッセイ―　L.L.パシネッティ著　大塚勇一郎，渡会勝義訳　日本評論社
サービス論体系　斉藤重雄著　青木書店
現代経済学講義　早見弘〔ほか〕著　中央経済社
経済原論の課題　―現代社会の生活と労働―　松原昭著　御茶の水書房
経済統計学　阿部喜三著　新版　日本評論社
経済・経営のための基礎数学　石田望著　改訂版　実教出版
経済・経営のための基礎数学演習　石田望著　実教出版
経済統計入門　中村隆英〔ほか〕著　東京大学出版会
ミルとマルクス　杉原四郎著　増訂版　京都　ミネルヴァ
ケインズ主義の再検討　早坂忠編著　多賀出版
近代経済学　―経済分析の基礎理論―　新開陽一〔ほか〕著　新版　有斐閣
消費行動パラダイムの新展開　奥田和彦著　白桃書房
価格の心理　小嶋外弘著　ダイヤモンドセールス編集企画(発売)　ダイヤモンド社
現代日本経済の研究　―家計貯蓄消費行動の実証分析―　堀江康熙著　東洋経済新報社
戦後日本資本主義史　正村公宏著　日本評論社
先端技術と日本経済　宮崎勇　碓井彊編　日本評論社
分析日本経済　新保生二著　東洋経済新報社
ジャパン・シンドローム　日本病の診断と治療　J・ウォロノフ著　長谷川慶太郎訳　ダイヤモンド社
ヨーロッパの賭　―経済再建への切り札―　M.アルベール著　千代浦昌道訳　竹内書店新社
英国経済空間の探求　―海からの経済史論―　長野敏一著　文眞堂
国際経済　37　戦後40年・世界経済の構造変化と展望　国際経済学会編（同編者）
経営史序説　大場四千男著　杉山書店
ＯＲ事例集　―ＯＲ事典・増補別冊―　日本オペレーションズ・リサーチ学会編　日科学連
日本の中小企業研究　全3巻　中小企業事業団・中小企業研究所編　有斐閣
現代の巨大企業　―国際比較の視角から―　富森虔児編著　新評論
実証分析日本の企業成長　古川栄一編著　中央経済社
アメリカ・ハイテク企業の成功と失敗　勝ち残りへの多角化提携戦略　K.R.ハリガン著　佐伯光彌，平形芳郎訳　白桃書房
先端企業レポート　―その成功と失敗―　奥平恵著　日本経営出版会
21世紀に生きる協同組合　農林中央金庫調査部研究センター編　斉藤仁監修　家の光協会
公共企業概論　辻和夫著　昭和堂
日本型経営の現地資源化　村山元英，大泉光一編著　白桃書房
マネジメント図表のつくり方・活かし方　―どんな会社・職場でも使える基本21図表―　田代計之著　日本実業出版会
企業情報ネットワーク　花岡菖著　日刊工業新聞社
帳表・図表のつくり方・活かし方　井上淳一著　日本実業出版社
事務革新(オフィス・イノベーション)のABC　日本経営協会編　日本経営協会
業務改善オフコンシステムの実務　日本帳票管理協会編　ぎょうせい
パソコンリレーショナルデータベース活用法　ひとつのデータが10倍役に立つ　野々山隆幸著　廣済堂出版
労務管理練習帳　―応用問題―　本田壮一著　同友館
新入社員教育百科　―能力開発手法のすべて―　佐藤修也，俵実男著　マネジメント社

新着図書(選)－工学

第三角法による図学　大久保正夫著　朝倉書店
第一角法図学　大久保正夫，助広　毅著　日刊工業新聞
多変量解析入門　C.チャットフィールド，AJコリンズ共著　福場庸ほか編　培風館
パソコンによる多変量解析　小林竜一著　培風館
統計学　種子田重彦著　成文堂
日本暦西暦月日対照表　野島寿三郎編　日外アソシエーツ
ＮＨＫ地球大紀行１　ＮＨＫ取材班著　日本放送出版協会
1983年日本海中部地震震害調査報告書　土木学会編
図解ゲームの指導事典　三隅達郎監修，高橋和敏，川向妙子編　不昧堂
固体力学におけるコンピュータアナリシス　日本機械学会編　コロナ社
構造工学論文集，33Ａ　土木学会編　日本学術会議構造工学研究連絡委員会監修　土木学会
権造解析学３―弾性連続体の解析―　小松定夫著　丸善
複合材料―複合化技術と材料の多機能化　島村昭治，宮入裕夫著　実教出版
日本技術の社会史―講座―全８巻，別巻　人物篇全２巻　永原慶二，山田啓二編　日本評論社
ＱＣ的ものの見方・考え方　細谷克也著　日科技連出版社
土木学会北海道支部論文報告集43：昭61年　札幌土木学会北海道支部
新体系土木工学42　土木学会編　技執堂
コンクリートの耐久性　岡田清編著　朝倉書店
ポケコンによる手計算完全省力土木測量トラバースの平均計算法　金井弥太郎著　山海堂
土木構造物の設計計算プログラム１，１II，２～４　土木構造物設計計算プログラム研究委員会編　山海堂
チェックポイントに基づく土木施工管理の実務１～３，５－６，８－10，12－14，17－19，22　山海堂
水環境指標　合田健編著　思考社
下水道技術シリーズ　３，４　工水道技術研究会編　近代図書
下水道工学例題演習　丹保憲仁　岡本成之編　近代図書
環境科学―人間環境の創造のために―　天野博正著　技報堂
都市のウォーターフロント開発　D.M.レン著　横内憲久監訳　鹿島出版会
建築ガイドブック　新建築編集部編　増補版　新建築社
茶室と露地　中村昌生監修　小学館
鉄筋コンクリートの構造設計入門　田中礼次著　改訂版　相模書房
イラストによる家づくりハンドブック　東京建築設計監理協会都市住宅委員会編　井上書院
住まいの地下室―新しいスペースづくり鋼製地下室を中心にして―東方洋雄著　オーム社
西ドイツ自動車工業の労使関係―フォルクスワーゲン工場の事例研究―　徳永重良編著　御茶の水書房
コンピュータネットワークとプロトコル　D.W.Davies〔ほか〕原著　富永英義〔ほか〕共訳　コロナ社
高度総合通信ネットワーク　衛星通信とパケット交換　ロイ・D・ロスナー著　平田康夫〔ほか〕訳　啓学出版
構造化フローチャートによるプログラミング入門　K.アガーワル著　戸内順一訳　啓学出版
ＣＯＢＯＬ１―基礎編―　ＣＯＢＯＬ言語研究会編　酒井書店
ＣＰ／Ｍ―86ユーザガイド　M.ダームク著　小澤勉訳　アグロウヒルブック
チップとバイトのものがたり　パソコンのしくみと　½はたらき　ヘレン・ディビーズ　マイク・ウォートン著　グレアム・ラウンド絵　岸和孝訳　佑学社
文学処理のための計算機科学概論　吉郡延治著　総研出版
システム設計入門　―コンピュータの活きた使い方―　石部公男，青井精一著，11版　同文館

新着図書（選）－法律

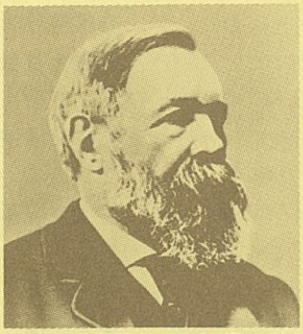
現代日本社会の構造変化３　現代日本の資本主義　山口正之〔ほか〕編　有斐閣
レヴェラーズ政治思想の研究　山本隆基著　京都法律文化社
近代イギリス政治思想研究　T.H.グリーンを中心にして　万田悦生著　慶應通信
民主主義思想の原流　有賀弘，佐々木毅編　東京大学出版会
ミカドの肖像　猪瀬直樹著　小学館
ソ連の社会と外交　中西治著　南感社
福祉国家５　東京大学社会科学研究所編　東京大学出版会
日本の都市政策　建設省監修　ぎょうせい
モロッコ外交史　1900―1912年　モハメッド・オマール・エル＝ハジュイ著　南村隆夫訳　勁草出版サービスセンター
黒瀬正三郎先生傘寿祝賀論文集：現代における法の理論と実践　京都　法律文化社
日本近代文法資料叢書　26―28　法務大臣官房司法法制調査部監修　商事法務研究会
新演習法律学講座　９―10　青林書院
現代憲法入門　山下健次編　法律文化社
民法口話２　篠塚昭次著　有斐閣
民法１～９　遠藤浩〔ほか〕編　第３版　有斐閣
錯誤法の研究　小林一俊著　酒井書店・育英社
物権法制の基礎理論　高島平蔵著　敬文堂
債権法各論要説　佐藤隆夫著　勁草書房
借地権　米山鈞一著　７訂版　税務経理協会
株主総会のあり方　大阪証券代行代行部編　商事法務研究会
手形・小切手訴訟の手びき　下出義明〔ほか〕著　青林書院
刑法各論　斉藤誠二編著　八千代出版
司法と人権感覚　伊達秋雄著　有斐閣
裁判実務大系11　不動産訴訟法　青林書院
検察庁法　―逐条解説―　伊藤栄樹著　新版　良書普及会
注解民事手続法　４－２　斉藤秀夫　菊地信男編　青林書院
民事上訴制度の研究　花村治郎著　成文堂
保全訴訟の実務１　丹野達著　酒井書店
規制産業の経済法研究２　根岸哲著　成文堂
著作権のノウハウ　半田正夫　紋谷暢男編　第３版　有斐閣
宮崎繁樹教授還暦記念〔論文集〕　二十一世紀の国際法　住吉良人，大畑篤四郎編　成文堂
国際取引の法務戦略　鈴木正貢著　中央経済社
不当労働行為審査手続　高嶋久則〔ほか〕編　青林書院
労働・社会保険法の基礎知識　慶谷淑夫著　労働法令協会
団体交渉権の研究　光岡正博著　新訂版　法律文化社
マイコン革命と労働の未来　剣持一巳著　日本評論社
パートタイマー　―その実態と意識―　東京労働基準局編　新版　日本労働協会
窪田隼人教授還暦記念論文集　労働災害補償論　本多淳亮〔他〕編　法律文化社
インドの労使関係と法　香川孝三著　成文堂
企業レベルの労使関係と法　欧米四ヶ国の比較法的研究　蓼沼謙一編　勁草書房
現代日本教育制度史料19，21，22　現代日本教育制度史料編集委員会編　東京法令出版
看護の安全性と法的責任３－６　高田利廣著　日本看護出版協会
ＷＨＯ世界健康百科　―日本ＷＨＯ協会20周年記念出版―　全10券　世界保健機関協力　同朋舎
明日の医療９，10　福武直，佐分利輝彦編　中央法規
医療と人権　―医師と患者のよりよい関係を求めて―　加藤一郎，森島昭夫編　有斐閣
注釈特許法　紋谷暢男編　有斐閣

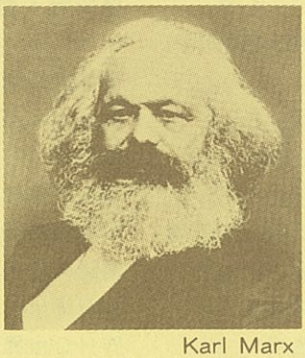
古典の窓
特集

私の図書館史研究散歩（第6回）
Chetham's Library

和泉田　正　宏

ケルト関係のことどうもありがとう。2，3時間つぶして，チェタム図書館でもっとくわしいことを探してみよう，たぶん，いくらかは見つかるだろう。(略)最近は，また例の小さなアルコーヴのところで，24年まえに僕たちが席を取っていた，あの多辺形の見台に坐っている。僕はこの場所がとても好きなのだよ，あの色とりどりの窓のせいで，あそこはいつもよい天気だ。


Friedrich Engels


Karl Marx

これは，マンチェスターにいるエンゲルス（1820—1895）がロンドンのマルクス（1816—1883）に宛てた手紙（1870．5．15付）の一節である。当時，エンゲルスは父親が共同経営する「エルメン・アンド・エンゲルス商会」の仕事からようやく解放され，アイルランドの法典や文法書の研究に取り組んでいたのである。

ここで，時計の針を1842年11月末まで引きもどそう。オランダから船でテームズ川をさかのぼり，ロンドンに上陸したエンゲルスは，イギリスの生なましい状態を研究してから，任地であるマンチェスターに向った。22才の誕生日をむかえたエンゲルスは「エルメン・アンド・エンゲルス商会」のビジネス活動を通じ，さらにアイルランド人の娘で紡績工場の女工である恋人メアリに紹介された多くの労働者との接触により，社会や歴史における経済的事実の決定的な重要性を認識するようになった。

1944年の夏，マルクスをパリに訪ねたあとブリュッセルに滞在中のエンゲルスは，1845年の7月から8月にかけて，マルクスを案内してイギリスに旅をした。エンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』を出版した直後であった。このとき，マルクスは初めて資本主義の先進国イギリスの地を踏み，産業革命の結晶地マンチェスターを訪ねたのである。マンチェスターに着いた2人は毎日Chetham's Libraryに熱心に通い，経済学の文献を漁った。冒頭の手紙はそのときのことを回想した描写である。

エンゲルスの手紙に登場するChetham's Libraryは，1653年，マンチェスターの実業家Humphrey Chetham（1580—1653）の遺言と遺産によって設立されたイギリスでは最初のfree public libraryである。2人が通った頃のChetham's Libraryは，蔵書が神学，歴史，科学，芸術，商工関係のほか学術団体の紀要類を含めて約19,000冊であった。利用者も国教・非国教の牧師，教師，弁護士，事務員，商人，農民，技術者，職工，見習徒弟などその範囲は広く，すでに近代公共図書館としての性格を持ちあわせていた。

マルクスがBritish Musiumの読書室で経済学の研究に没頭したことはよく知られているが，それよりも5年前に，エンゲルスとマルクスがイギリスの最初のfree public libraryであるChetham's Libraryで机を並べていた光景を思い浮べるのも楽しいことである。

修道院を思わせる重厚な石造りのChetham's Libraryは，現在も中世末期のマンチェスターの雰囲気をただよわせて，当時のままの面影を残している。

（いずみだ・まさひろ　本学事務部長）

開館時間

本館	工学部分室
9：30～20：00（月～金）	9：30～17：00（月～金）
9：30～18：00（土）	9：30～13：00（土）

日曜祝日，創立記念日は休館いたします。

北海学園大学附属図書館報　図書館だより
Vol. 9 No. 2　（通巻 102号）

本館　〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号
(011) 841-1161 内線 270～275・279
工学部分室　〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
(011) 561-2911 内線 813～814